嫁を暖かく迎えるために，行政が積極的にアフターケアーを行っている所もある。

本論では来日後の花嫁の生活を見ていくと共に，地域の目を通した花嫁さんと彼女達の受け入れに伴う地域の変容に着目し，現在の農村の姿にまで視点を広げて考えてみたい。フィールドは，行政が積極的に花嫁さんのサポートを行っている，新潟県中魚沼郡川西町を選んだ。

実際の聞き取りの中で，花嫁さんは一般の日本の家族とそう変わらない生活をしていると思われた。「家」を継ぐ意識をはっきりと認識することはできなかったが，少なくとも両親の引退後は農業の手伝いをすると言ってる。地域の彼女たちに対する評価は高い。しかし日本人との間に見えない壁を感じとっている。

地域の話では，嫁不足の原因を若者の職場不足に求める人が多く，「家」の話を口に出す人はあまりいなかった。最近では女性の場合，土地に固執して結婚を逃すより，土地を捨てて他へ結婚する場合もあるという。農村における土地の考え方も少しずつ変わってきている。それでも外国人花嫁さんの夫が全員長男で，両親と同居している点を考えると依然「家」の問題が見え隠れするのも事実である。ただし家庭の中で親夫婦と息子夫婦に生活の分離も現れてきている。

横浜市における市営住宅をとりまく環境の変化について

内　藤　聡　美

この論文は，各時代の集合住宅なかでも市営住宅を取り上げ，そのミクロ的・およびマクロ的要素を比較検討することで，時代ごとの特徴をつかみ，さらにはそれらの特徴が各時代ごとの社会情勢それに基づく住宅需要を反映しているかどうかを見ていこうというものである。フィールドは横浜市内全域である。

具体的な建設例を取り上げる準備段階として書かれたのが第１章と第２章である。

第１章ではとくに市営住宅にこだわらずに，集合住宅についての日本全国にいえる流れを追ってみた。ここでキーワードとなっているのが1970年代の“転換期”である。転換期を迎えた背景としては，①高度経済成長，②集合住宅の質のあまりの低さ，③集合住宅への定住志向の３つが考えられる。そのうえで転換期以後の集合住宅を考えるにあたっては，1970年代前半までの第１期，1970年代後半の第２期，1980年代以降の第３期に分けることができることを示した。

第２章では住宅建設を計画面から検討してみた。横浜市の住宅供給は，国が打ち出した住宅建設５ヵ年計画と，昭和56年以降については「よこはま21世紀プラン」に基づいて行なわれていることを示した。

第３章では横浜市営住宅の具体的な検討がなされている。第１節においては，現存の市営住宅が平面的にどのように広がっていったのかを，各年代の地形図にプロットをしていくことで見ていこうとした。この作業から，市営住宅はまず都心に近い鉄道沿線上に，次に市の南部の丘陵地を切り崩す形で，そして最後に北部の丘陵地や海岸部の埋立地に，といった順に展開していったことがわかった。第２節においては，昭和20年代から昭和60年代までの各年代ごとの具体的建設例を取り上げ，それぞれの住宅についての特徴を細かく探っていこうとした。具体例として取り上げたのは昭和20年代から順に，三ッ境住宅，十日市場住宅，勝田住宅，金沢住宅，楽老住宅の５つの住宅である。第１節で使用した地形図を基にまずは建設当時の土地利用状況や交通状況などを考察した。そのうえで実際にそれぞれの住宅を訪れ，地形図からは読み取れない団地内部の構造や現在における周辺の土地利用状況や交通状況などを調査した。それぞれの特徴については本文で述べたとおりである。

想像していた以上に各時代ごとの違いは顕著であった。行政の政策に基づいてつくられる公営住宅のなかでも，とくに市営住宅というものはその時々に一番必要とされる住宅であるのだから，社会的背景の影響が如実に表れるものなのだろう。